
A month

篠咲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A month

【Nコード】

N0776S

【作者名】

篠咲

【あらすじ】

夫婦なのか、恋人なのか、友達なのか。

遠すぎず、そして近すぎないふたりの関係を描いたもの。とかいつてただの惚気話だったりします。

二百文字きっかりでオール会話文の構成です。心理・情景描写一切なしです。苦手な方はご遠慮ください。

三十夜連続・二百文字ドラマ「A month」ここに開幕！
つてそんな大層なものじゃないですが。

1日・その日は朝から

「そう怒らないでくれよ。今日は四月一日じゃないか」

「エイプリルフールなら何を言ってもいいの?」

「そういう訳じゃないが」

「そうでしょう?」

「そうだね。僕が悪かったよ。これは本当さ。お詫びに朝食を作ろう」

「本当?」

「嘘じゃない」

「ふふ、わたしのは嘘よ。私があんな冗談で怒ると思っの?」

「そうだよね。なら」

「朝食はあなたが作ってよね。嘘じゃないんでしょう?」

「………なんというか、そんな君がとても、嫌いだよ」

1日・その日は朝から（後書き）

エイプリルフールだということを思い出してわざわざ書き替えました

2日・時間の問題

「時間がないんだ」

「え、何のことなの？」

「とにかく、時間が無いんだ。今も、刻々と減っている」

「なぜそんなに急いでいるの？」

「よいきなことは言わないでくれ。足りなくなる」

「教えてくれないの？」

「ああ、もう半分なくなってしまった」

「あなたが喋らなければいいんじゃないの？」

「そんなことを言ったって。あと数十文字しかないじゃないか」

「時間は文字ではなく分や秒で数えるのよ」

「ああ、もう数文字しかないじゃないか」

2日・時間の問題（後書き）

字数制限や掌編書きさんなら一度はやりますよね

3日・空耳

「私は耳が良いの」

「うさぎみたいだね」

「自信があるの。遠くの音も小さい音も聞き取れるわ」

「じゃあ、僕が何と言ったか聞き取れることはできるかい？」

「ええ、なんなりと」

「じゃあ、いくよ。——僕はうさぎさんに惚れてしまったみたいだよ」

「あら、生憎あなたがなんと言ったかわからなかったわ。もう一度言ってくれるかしら。大きな声で、意味も添えて」

「ああ、君って本当は、うさぎじゃなくて賢い狐なんじゃないかな？」

3日・空耳（後書き）

空耳をどう生かすか苦労しました

4日・ぬるい雨

「降ってきてしまったわね」

「そうだね」

「どうでしょうか」

「どうしようね」

「聞いてる？」

「聞いてるよ」

「何を考えているの？」

「ろくでもないことさ」

「話してくれない？」

「鞆の中に僕の折り畳み傘が一本ある。その傘を君に渡して、僕は新しい傘を買うか、はたまた濡れて帰るかを悩んでいたんだ」

「あなたの結論は？」

「雨に濡れながら帰るのも男らしくて良いんじゃないかと」

「素敵ね。でも相合傘はもっと素敵だと思うわ」

4日・ぬるい雨（後書き）

くれぐれも風邪を引かないでほしいものです

5日・5センチ

「君と僕の間にある5センチメートル」

「ええ。それがどうかした？」

「僕たちの心の距離だと思うんだ」

「そうね。その話続けて？」

「僕たちの間には5センチの見えない壁があるんだよ」

「穢れた人間には見えない、不可視の壁ね」

「この5センチを越えれば、僕たちはキスが出来るね」

「ええ、可能だわ」

「でも、僕は今、君にキスはできない」

「あら、どうして？」

「僕は、君のミントの歯みがき粉の匂いだけでも苦手なんだ」

5日・5センチ（後書き）

私には壁どころか壁の向こうの相手すらいません

6日・価値観の違い

「完熟よ」

「いや、半熟だね」

「半熟なんてまだ生じゃない」

「完熟なんてただの茹ですぎじゃないか」

「私、あなたの思考がわからないわ」

「僕も、君の考え方がわからない」

「私たち、こんなに気が合わないなんて」

「そうだね。君ならわかってくれると思ったのに」

「わかり合えないのね、私たち」

「そうみたいだ」

「なんであんなに熱くなってしまったのかしら。たかがゆで卵よ」

「さねどゆで卵だろう？」 さあ、少し遅い朝食にしよう」

6日・価値観の違い（後書き）

私は完熟派です、最近

7日・君を例えよう

例えばだよ。僕の目の前に、真面目そうで、実直で、賢くて、強くて、でも泣き虫で、笑った顔が素敵で、時には冷たくて、強がり、優しく、素直じゃなくて、横顔が美人で、手がきれいで、花が好きで、休日は読書していて、ポニーテールと黒眼鏡が似合って、音楽と絵画が趣味の女性がいたら、すぐに告白するのになあ」

「それは誰のことかしら？」

「いいや、ただの例え話さ」

「あら、残念だね。その人、あなたの目の前にいるのに」

7日・君を例えよう（後書き）

そんな女性になりたいです

8日・チョコレイト

「甘いものといえば？」

「焼きたてのクッキー」

「苺のショートケーキ」

「シナモンドーナツ」

「夏の日のアイスクリーム」

「手作りアップルパイ」

「トッピングたっぷりのクレープ」

「抹茶白玉パフェ」

「ふわふわのスフレ」

「ホイップカスタードのシュークリーム」

「メープルがかかったホットケーキ」

「サクサクのミルフィーユ」

「温かいミルクココア」

「スイートポテト」

「砂糖菓子」

「キャラメルポップコーン」

「僕」

「それ本気？」

8日・チヨコレイト（後書き）

最近お菓子作りにはまっています

9日・姉、弟

「僕たち兄妹みたいじゃない？」

「そうかしら。姉弟じゃなくて？」

「僕は弟に思われているのかい」

「兄には思えないわ」

「ひどいな。男にとってそれはつらいよ」

「あら、そうなの？」

「恋人に、私たち友達だよね、と言われるくらいきつい」

「私たちは、友達かしら？」

「恋人だというのかい？」

「姉弟がしつくりくるわね」

「やっぱり、姉なのか」

「あなた、兄弟は？」

「ひとりっこだけど」

「だから、上の子の苦勞がわからないのよ」

9日・姉、弟（後書き）

私には弟がひとり居ます

10日・勤勉を尊ぶ

「あら、お勉強？」

「うん。たまには頭を使わないと」

「真面目なことで結構だわ」

「君の真面目さと賢さにはかなわないよ」

「私ってそんなにお堅いかしら？」

「自覚が無いのかい？」

「私、そんなに凝り固まってるかしら」

「深刻に悩む程ではないと思うよ」

「そうなのかしら？」

「いや、僕にもわからないよ。勉強するだけで君のことが理解が出来たらいいのにね」

「あら、人間なんて、一筋縄では行かないものよ。特に、私なんかはね」

10日・勤勉を尊ぶ（後書き）

私は勉強苦手です

11日・軋む

「うるさいわ」

「すまない、このベッドに二人はきついらしい。みしみしと軋みっぱなしだ」

「買い替えれば良いのに」

「君がベッドから降りるのが最善の解決法じゃないかな」

「寒いわ」

「今夜は暖かいだろう?」

「枕も持っていくわよ?」

「それは止めてくれ。僕の馴れ親しんだ枕なんだ」

「これじゃないと眠れないっていうの?」

「いいじゃないか。ベッドの上であまり動かないでくれ。本当に壊れる」

「だから、買い替えれば良いのよ」

11日・軋む（後書き）

うちのベッドは一人でも軋みます

12日・知らない人

「今の電話、誰から？」

「さあ。間違い電話みたいよ」

「その割りには、親しげだったけれど？」

「そうかしら」

「まるで、別れたはずの男からの電話のような口振りだったよ」

「それは当然よ。別れた彼女に向けたはずの電話が、間違っ
てきたんだから」

「それは、君に向けられていた電話ではなくて？」

「あなたらしくないわね。詮索するなんて」

「そうかい？」

「女性には秘密があるのよ。たとえば、間違い電話だったとしてもね」

12日・知らない人（後書き）

最近知らない番号から電話かかってくる、私の携帯

13日・思わぬ遭遇

「さっきの人、誰？」

「前の彼女さん」

「あなたの？」

「そうだけど？」

「意外だわ」

「そうかい？」

「だってあの人、私と全然違うじゃないの。その、性格のタイプとか」

「そんなこと言うのは、君らしくないね」

「そうかしら？」

「僕が、前の彼女の面影を追って君を見つけた、と思うのかい？」

「女性は気になるのよ、前の恋人のことが」

「君も？」

「そうね」

「僕は、今、隣に居る君が僕をどう思っているのか、の方が気になるよ」

13日・思わぬ遭遇（後書き）

昨日の話と対：似てるだけです

14日・切り傷

「痛っ」

「おや、どうしたんだい？」

「紙で指を切っちゃったみたい」

「油断したときに限って切られるよね。裏切りだよ」

「切られたのは裏じゃなくて指だけだね」

「指でよかったんじゃないかな」

「どういうこと？」

「裏切りで受けた心の傷は塞がらないものさ」

「まあ、馬鹿なことを言っつて」

「誰も信じられないよ。自分以外の何者も。いや、自分すら信じられない……なんて、言ってみたいんだけどな」

「絆創膏取ってくれるかしら？」

14日・切り傷（後書き）

切り傷は痛いですね、心も体も

15日・仄かに残酷

『お帰りなさい。お夕飯出来ましたよ。それとも先にお風呂にします?』

A・先に君の素敵な手料理が食べたいよ

B・まずは君から戴きたいな

『まあ、あなただったら。えっ、何か言いました?』

A・背後から抱きしめる

B・振り向かせてキス

『あっ、あなた……』

「形になぞらえるだけの会話はつまらないね」

「ええ、そう思うわ。でも彼女たちが私たちより楽しそうに見えるのはなぜかしら?」

「……夕飯できたよ。先にお風呂にするかい?」

15日 仄かに残酷（後書き）

うーん、なんか間違えた気がします…うーん

16日・恋情+衝動」」

「この映画観た？」

「いいや。どんな話なんだい？」

「付き合っている彼氏が好きすぎて殺してしまう女の人の話」

「それは怖いね」

「でも私その気持ちわかる気がするの」

「おや、君はそんな人だったのかい？」

「なんとなくわかるのよ。愛する人には自分のことだけを見てほしいの」

「そういうものなのかい？」

「たぶんね」

「うむ……あ、僕のことは殺さないでね」

「大丈夫よ。あなたのことは、殺したくなるほど好きじゃないから」

16日・恋情+衝動Ⅱ「」（後書き）

この映画はフィクションです

17日・優しい臆病者

「あなたは優しすぎるわ」

「前にも聞いたよ、それ」

「私だけじゃなくて、誰にでも優しいのね」

「それは、僕が優しいんじゃない、僕は厳しいことが出来ないからさ」

「そうなの？」

「殻を突き破るのが怖くて、優しくしか突けないんだ」

「閉じこもった雛鳥みたいね？」

「殻の外にどんな世界が広がっているかを知ろうとしない、ぼくはただの臆病者さ」

「そんなことはないわ。その嘴で他者を傷つけない、あなたはやっぱり優しい人よ」

17日・優しい臆病者（後書き）

臆病者は、居ないのです

18日・桜色

「散っちゃったね」

「そうだね」

「なんだか切ないわ」

「そうかい？」

「だってもう見られないのよ。散ってしまった花びらたちは、もう咲くことはできないのよ」

「でも来年も咲くだろう？」

「同じ花が咲くことはないわ」

「別に、桜の花が主役ではないよ？ 今は新芽が成長するし、夏には葉が茂る」

「そうね。でも私は春が好きだわ」

「じゃ、来年も二人で春を眺めていたいね」

「その時までにはもう少し素敵な人になっていてね」

「はい」

18日・桜色（後書き）

この話は、すとむみずみ氏の『カラレス・Colors -
で書かせていただいたものを（勝手に）若干リンクさせていただき
ました。そちらのタイトルは桜色ではありませんが。

19日・泣きたかったわけじゃない

「涙を見せたくなんかないわ」

「うん、君は強いひとだからね」

「あなたは、いつでも優しいのね」

「そうかな？」

「そうよ」

「じゃあ、僕の日頃の行いは成功していると言えるね。僕はいつでも君に優しくしようと思っているから」

「優しくすぎるわ。だから私はあなたの前で泣いてしまうの」

「泣いてもいいんだよ。そうして人は強くなるから」

「優しくしないで。涙が止まらなくなる」

「君に優しくできないなんて、僕が泣いてしまうよ？」

19日・泣きたかったわけじゃない（後書き）

涙をみせるのも、強さ。

20日・留守番電話

ピー

「あ、僕だけど。風邪の具合は大丈夫かい？ 君が僕に助けを求め
るくらいだから、ずいぶん辛いのかい？ 今はちよつと出先だから
会えなくてごめんね。無理しちゃ駄目だよ。君はいつも弱っている
ときに無茶をするんだから。たまにはゆつくり寝ているといい。休
んでいなかったから倒れてしまったんだろう。何か必要な物があつ
たら言つてよ。時間ができたらそっちに向かうから。あとは、何か
あるかい？くれぐれも無理したりなん」

ピー

20日・留守番電話（後書き）

弱つてるときほど、人の優しさが身にしみますよね

21日・決めごと

「私たちはあちらの世界でも一緒に居られると思う?」

「何の話?」

「しんだ後の話。私はあなたを忘れてしまつかもね」

「僕は忘れてよい人間というカテゴリーに分類されているのかい?」

「そのつもりはないわ。でも、忘れてしまつかも」

「合図を決めればいいよ。それなら安心?」

「どんな合図?」

「僕たちのお気に入りの歌を歌えば良いんじゃないかな。同じ歌を歌う人がいたら、それはきつと君だから」

「その歌を覚えていたら、ね」

21日・決めごと（後書き）

めぐり合いは奇跡

22日・厭な予感

「おかしいわ」

「なにがだい？」

「厭な予感がするわ。あなたどうしたの？」

「それはひどいな。僕はいつも通りさ」

「何を企んでいるの？」

「何も企んでなんていないよ」

「気持ち悪いわ」

「そんなことはない。ちょっと気持ちが浮ついているだけで」

「それ自分で言う？」

「君が気付いてくれないからだよ」

「だから何のこと？」

「言わせる気かい？」

「言えないことなの？」

「いや、言えないわけではないけど、今日は僕の誕生日なのさ」

22日・厭な予感（後書き）

自分では言いにくいこともあります

23日・夢の風景

「夢にあなたが出てきたわ」

「それはうれしいね。僕は何か言っていたかい？」

「笑っていたわ」

「そうかい」

「あなたらしくなかった」

「それを僕に言われてもね」

「でも、夢のあなたのほうが素敵だったわ」

「嫉妬するよ？」

「だってそう思ったんだもの」

「いったい僕は何をしたんだい」

「優しく頭を撫でてくれた」

「うん」

「大丈夫だよって言ってくれたわ」

「それから？」

「そつと口づけしてくれた」

「じゃあ、正夢にしてあげるよ」

23日・夢の風景（後書き）

夢の世界へ逃避行

24日・昼下がりの会話

「すき」

「きもち悪いわ」

「わっ、そんなこと言うのかい」

「いやなんだもの」

「ノーマルな告白の台詞だろう？」

「うそよ」

「よしてくれないか、これでも恥ずかしいんだ」

「だめな人ね」

「ねえ、その言葉は厳しすぎじゃあないか？」

「かまわないわ、相手はあなただから」

「らんぼう（乱暴）だなあ」

「あいしてると言える？」

「るい（類）を見ない告白のきょうよう（強要）」

「うそでも言えないと？」

「とんでもない、君がいちばん」

24日・昼下がりの会話（後書き）

隠されたしりと

25日・実験

「傘は？」

「無いわよ」

「どうしよう」

「雨宿りする？」

「しょうがないな」

「止むといいけどね」

「傘が無い時に限って」

「本当。やめてほしいわ」

「あつ、洗濯干したままだ」

「うそ、洗い直しじゃないの」

「困った。明日着ていくのにな」

「こんな時に限ってね。御愁傷様」

「朝の天気予報では曇りだったのに」

「残念。私のも干したままなのかしら」

「多分ね。おや、雨はもう上がったかな」

「あら、早く帰りましょう。虹が出る前に」

25日・実験（後書き）

こんな文章の実験

26日・遠くへ、もっと遠くへ

「逃げよう」

「どこへ？」

「二人だけの世界へ」

「素敵なところかしら」

「そうだろうね」

「あなたと？」

「そうだよ。嫌かい？」

「いいえ、素敵だと思うわ。でも、なんで？」

「君を他の人間に奪われたくないからさ」

「それなら無意味だわ。だって私にはあなたしかいないんだもの」

「それでも不安になるんだよ」

「そうなの？」

「そういつものなのさ、特に僕はね」

「大変なのね」

「一緒に行こう」

「いいけど、私を置いていかないでね」

26日・遠くへ、もっと遠くへ（後書き）

世界の隅っこに行こう

27日・静かな夕暮れ

「あら綺麗な夕日」

「いや、僕は君の横顔の方が好きだな」

「うそ言わないでよ」

「え、本当のことだよ」

「おもってるの?」

「かなり本気でね」

「きつと出任せでしょう」

「くやしいけど、実はその通り」

「けっこう適当なのね」

「こんな僕は嫌いかい?」

「さあね」

「しょうがない。改めて言っよ」

「すきだ、って言っんでしょ?」

「せっかく言おうとしたのに何で先に言っんだい」

「そんなことわかるわ。あなたが何を言っただなんて」

27日・静かな夕暮れ（後書き）

あいっえお、かきくけこ。

28日・ステップ

「痛い」

「あつごめん」

「もう、なんて下手なの」

「ごめんなさい」

「ただのダンスステップなのに。私の足ぼろぼろになるわ」

「未経験なんだから」

「だからさっきから教えているじゃない」

「僕には無理だよ」

「じゃ、あなたじゃなくて他の人とペア組もうかしら」

「それはやめてくれよ。頑張るから」

「あなたさっき無理だつて言ったじゃない」

「僕は君と踊りたいんだ。君しかないない」

「じゃ、ステップ覚えて、痛っ」

「ごめんなさい」

28日・ステップ（後書き）

踏みまくりのワンマンプレイヤー

29日・薬指の温度

「指輪が欲しいわ」

「指輪？」

「そう、指輪。宝石なんてはまっけていなくていいの。ただ、薬指を彩ってくれるだけでいいの」

「素敵だね」

「ふとした時に目に入るような、アクセントになるもの」

「うんうん」

「私のために作られたような、指に馴染むもの」

「なるほどね」

「私の薬指はどう輝くのかしらね」

「冷たく？ それとも暖かく光るのかい？」

「嵌めてみないとわからないわ」

「じゃあ、その指輪は僕が君に贈った方がいいのかな？」

29日・薬指の温度（後書き）

ひやりと、あたたかく。

30日・「もしも」だったとして「

」どういうこと？」

「今日で世界が終わるとしたら、最後に何をする？」

「わからないわ。自殺するかもね」

「どうして？」

「きっと、幸せになれる事を全て行っても、心は満たされなと思うの。だったら、今まで出来なかった事をやりたいの」

「なるほど」

「あなたは？」

「今日、世界が終わるとしたら——僕は君に告白するよ」

「じゃあ、世界が早く終わればいいと思う私は不謹慎かしら？」

「いや、やっぱり君と一緒に死のうかな」

30日・「もしも」だったとして「（後書き）

世界の終わりの、最後の一言は？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0776s/>

A month

2011年5月1日20時36分発行